(『国語学』179集　1994・12・31)

《短　信》

在日韓国人の本名と通名の使い分け

任　榮哲

一、はじめに

氏名は、人間が日常生活を営んで行く上において、基本的な役割を果たしている。そして、その名付け方や呼び方などには民族の心、伝統、文化が凝縮されている。ところで、在日韓国・朝鮮人の多くは、日本社会で、日本式の苗字(通名)を名乗って生活することを余儀なくされてきた。

筆者は、その実態を解明するため、彼らを対象とした調査を行い、その実態を報告している。今までの調査結果を概観すると、次のようになる(詳しくは、拙著『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』くろしお出版、一九九三を参照されたい)。

(a)在日韓国人の大多数は、通名という日本名で日常生活を営んでいるが、特に、男性よりも女性に、祖国生まれの一世より日本生まれの二、三世に、また、低学歴者、低階層の人々に、通名の所持率が高い。(b)これからの在日韓国人の名前のありかたについては、学歴の高い人ほど本名のみで名乗ってほしいという意識が強い。(c)女性が結婚によって身分事項に変更が生じた場合、夫の姓を名乗るか(日本式)、あるいは夫婦別姓として従前通りの姓をそのまま名乗るか(韓国式)という、結婚後の女性の姓のありかたに関しては、日本式で名乗るべきだという考え方が最も多いが、それには世代によってかなりの断層も見られる。(d)一般に、どの場面でも通名がより多く使われるが、本名がよく使われる場面は、「同じ民族が集まる」といった場面であり、「日本人が混ざる」場面では、本名の使用率は激減する。

さて、以上のような調査結果を土台にして、さらに、多量の調査を実施し、次のようなことを明らかにしたので、ここに報告したい。調査は、一九九二年、関東と関西に定住の在日韓国人四四九人(男二五五人、女一九四人)を対象としたアンケート調査である。

二、通名の所持とその理由、学校での名前

まず、通名の所持率からみると、在日韓国人の大多数は本名のほかに通名を持っている(八三・三%)。通名をもっていると答えた人だけに限定して、通名を名乗る理由について尋ねた結果のベスト・スリーは、あえて本名を名乗る必要を感じないため(一六・〇%)、からかわれたり、いじめられたりしないため(一二・九%)、仕事や地域社会での生活に差し障りがあるため(一一・八%)の順であった。ちなみに、あえて本名を名乗る必要を感じないとする者は自営業者に、からかわれたり、いじめられたりしないためとする者は二、三世の学生に、仕事や地域社会での生活に差し障りがあるためとする者は女性の方に、その割合が最も高い。

次に、本名を名乗るとどのような面で有利・不利かを自由記入式で尋ねてみた。その回答の内容は、次のようである。

・本名を使うと同胞同士の集まる公の場では有利である(男、四〇代、給与生活者、大阪市)

・本名を言うと韓国人であるということがわかる。しかし、その

後は自分を隠さずに付き合えるので楽な気分で付き合える。若いころ本名を名乗って仕事や会社でいろいろと差別されたことがある。（男、五〇代、自営業者、神戸市）

・同胞の間では何も隠す必要がないから本名で違和感なく通じる。しかし、まわりの日本人社会の中では通名を名乗る。それは自己の弱さだと思う。（女、四〇代、主婦、横浜市）

・本名を名乗るというのは、自分が韓国人であるということをまわりの人に分からせることになり、在日韓国人というものの存在を知らせ、理解を深めるきっかけになると思う。（女、二〇代、学生、堺市）

・本名を名乗ればこの社会では煩わしくなるばかり、なにも有利な点がない。本名では就職はもちろん、銀行関係、事業関係、友人関係、恋愛関係、ショッピング関係等、すべてにおいて不利で有利はなにもない。日本国は合衆国ではないから、日本に同化しなければ生きにくい。（女、三〇代、その他、東京都）

さらに、次の世代である子供や孫の日本の学校での名前について尋ねた結果では、本名を名乗る四四・五%、通名を名乗る二六・五%で、教育の場である学校ではかなりの人々が本名を名乗り、積極的な行動をとっていることがうかがわれた。ところで、注目したいのは、社会へ出てからは本名の使用率が低下してしまう(同胞に対しては二五・六%)、ということである。この変化にかかわる意識はどのように形成されるのか。今後、そのプロセスをダイナミックに追究してみたい。

三、親疎・上下関係による本名・通名の使い分け

親疎・上下関係によって本名・通名を、どのように使い分けているのか、通名を持っていると答えた人だけに、次のような形で尋ねてみた。

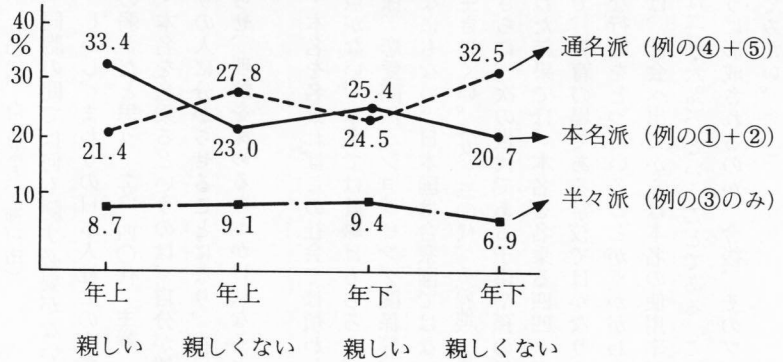
Q　次のような話し相手には本名・通名を、どのように使い分けていますか。例の中から、それぞれ一つだけを選んで、その番号を(　)の中にお書きください。

①　年上の親しい同胞(　)　②　年上の親しくない同胞(　)
③　年下の親しい同胞(　)　④　年下の親しくない同胞(　)

《例》①本名のみ　②通名より本名の方が多い　③同じ位に使い分けている　④本名より通名の方が多い　⑤通名のみ

それぞれの話し相手による変容を図から見ると、親しい同胞ほど本名が、親しくない同胞ほど通名がより多く使われていることがわかる。なお、本名派を親疎の差と上下の差に分類すると表のようになる。これによると、誰に対しても同程度に本名で名乗るのではなく、年上の人や親しい人にはより多く本名が用いられていることがわかる。また、上下関係と親疎関係では、親疎関係のほうが上下関係よりも効いているようである。このことは通名についても同様に言える。

図　親疎・上下関係による本名・通名の使い分け



※「どちらとも言えない」「無回答」は図から除外した。

表　親疎・上下関係の分類(本名派の場合)

関係	計算	差
親上―疎上	33.4－23.0＝10.4	親疎の差
親下―疎下	25.4－20.7＝ 4.7	(15.1)
親上―親下	33.4－25.4＝ 8.0	上下の差
疎上―疎下	23.0－20.7＝ 2.3	(10.3)

四、おわりに

以上、簡略ながら、在日韓国人の本名と通名の使い分けについて調べた結果を報告した。

多くの在日韓国人が日本社会のなかで、通名を使って日常生活を営まなくてはならないのは、いずれにしても日本社会のしくみや韓国人に対する姿勢、そして、マジョリティ側のマイノリティ側に対する理解・許容度などの問題、ひいては、多数派の言語や文化への同化意識や民族的なアイデンティティ、マイノリティ側の負の意識などと密接にかかわりあっていることは間違いのないところであろう。

【付記】　本稿は、「財団法人トヨタ財団」(The Toyota Foundation) 一九九一年度助成研究による研究成果の一部である。調査の企画の段階から真田信治先生より貴重な助言を頂いた。厚くお礼申し上げる。

――中央大学校助教授(韓国)――

(平成六年一月二十五日　受理)